

子育て家庭の生活と身近な人間関係

—家族・友人関係による分析—

二方 龍紀

Life Style of child-rearing Family and Close Relationships:

From Survey of Family relationships and Friendship

Riki Futakata

本稿の目的は、子育て家庭の意識と行動について、家族や友人関係との関わりを、分析することである。親世帯と同居している回答者よりも、同居していない回答者の方が、生活に満足している割合が高く、「暮らし向き」についても、「余裕がある」とする割合が高い。また、「悩みを相談できる友人がいる」回答者の方が、「悩みを相談できる友人がいない」回答者よりも、「家庭生活を重視する」という割合や「福祉社会志向」の割合が高い。

キーワード：「子育て家庭」「生活意識」「生活行動」「家族関係」「友人関係」

1. はじめに

「子育て家庭」が、社会的にも、政治的にも、注目されて久しい。その支援は、地域の様々な場面で、草の根的に試行され始めているが、手探りの状況が続いている。

この「子育て家庭」の生活が、どのようなものなのか、実際のデータをもとに分析を進めてきた。まず、「生活時間」という概念に注目し、その実際の暮らしについて、分析を進め、「平日」「休日」ともに、余裕のない暮らしぶりが明らかになった（二方 2014・2015）。*¹また、その家庭の中で営まれる生活の「意識」や「行動」に注目し、分析を進めたところ、「現在の生活の維持に懸命な子育て家庭」（二方 2016:50）の姿も明らかになった。

「子育て家庭」全体の傾向だけではなく、その中の差異についても、分析を進めてきた（二方 2017）。その結果、明らかになったのは、次の4点である。

（1）「子育て家庭内の経済的差異」と意識

・世帯収入が高い子育て家庭の方が、「生活に満足している」、「定住志向」、「将来は明るい」と答える割合が高い。

（2）「子育て家庭内の経済的差異」と家族意識・行動

・世帯収入の低い回答者の方が、「老親同居」について、積極的な意識を持っている。

（3）「子育て家庭内の末子年齢の差異」と生活意識

- ・「未就学」の子どもがいる家庭では、「自分の生活重視志向」の割合が高い。
- ・「未就学」の子どもがいる家庭の女性においては、「家庭重視志向」の割合が高い。
- ・子どもが「未就学」の家庭においては、「将来は明るい」という回答の割合が高い。

・「中高生」の家庭では、暮らし向きについて「苦しい」とする回答の割合が高い。

(4) 「子育て家庭内の末子年齢の差異」と家族意識・行動

・子どもが「未就学」の時に、「父方」の両親から経済的援助を受ける割合が比較的高い。

ここまでの分析からは、「子どもがより小さい時には「時間資源」、大きくなってからは、「経済資源」(二方 2017:57)において、「子育て家庭」が懸命になっているのではないかということが確認できた。つまり、「経済資源」「時間資源」の格差の中で、「懸命に」生活を紡ぐ「子育て家庭」の姿が見えてきた。

今回は、家族や地域社会の人間関係、友人関係などは、「子育て家庭」とどう関わっているのか、を分析していく。具体的には、家族や地域社会での人間関係の質(内容)や量が、子育て家庭内の差異(生活意識・社会意識・生活態度・行動)とどう関係しているのかを確認したい。

まず、第2節では、親との同居、あるいは、友人関係の差異に基づき、「子育て家庭」の意識の分析を進める。次に、第3節では、友人関係による差異と結婚・子育ての「行動面」の関わりについて、分析を進める。4節では議論を整理し、5節で今後の課題について検討する。^{*2 *3}

2. 子育て家庭の意識と家族関係・友人関係

2-1 家族による支援の得やすさ(親同居)

表1 親同居と生活意識の関わり

		生活満足	暮らし向き		
			余裕がある	普通	苦しい
男性	同居している	56.3%(9)	6.3%(1)	37.5%(6)	56.3%(9)
	同居していない	72.1%(111)	20.8%(32)	46.1%(71)	33.1%(51)
	検定				
女性	同居している	54.8%(17)	9.7%(3)	35.5%(11)	54.8%(17)
	同居していない	75.8%(141)	24.7%(46)	41.9%(78)	33.3%(62)
	検定	**		**	
全体	同居している	55.3%(26)	8.5%(4)	36.2%(17)	55.3%(26)
	同居していない	74.1%(252)	22.9%(78)	43.8%(149)	33.2%(113)
	検定	***		***	

2-1-1 生活満足

まず、家族による支援の得やすさとも関わる「親世帯との同居」と、子育て世帯の意識のかかわりについて、分析をした(表1)。生活満足の項目は、女性において、有意な結果が得られた。親世帯と同居していない女性の方が、同居している女性よりも、生活に満足している、と回答する割合が高いことが分かった(「同居」54.8%、「非同居」75.8%)。また、男性と女性を合計した全体での集計でも、親世帯と同居していない回答者の方が、同居している回答者よりも、生活に満足している、と回答する割合が有意に高いことが分かった(「同居」55.3%、「非同居」74.1%)。

同居の方が、一般に、子育てに関する支援を得やすいものと推測することができる。しかし、逆に、同居によって、生活満足が得にくい傾向が見られるという結果からは、やはり、世代による、ライフスタイルや価値観の違いが関わっていると考えられる。^{*4}

2-1-2 暮らし向き

生活のゆとりについての質問として「暮らし向き」についての項目がある。子育て世帯において、親同居と「暮らし向き」は、どのように関わっているのだろうか（表1）。

集計の結果からは、女性における結果と男女を合わせた合計の結果で、有意な違いを確認することができた。まず、女性においては、同居していない女性の方が、同居している女性よりも、「暮らし向き」について、「余裕がある」と答える傾向が見られることが分かった（「同居」の場合「余裕がある」9.7%、「普通」35.5%、「苦しい」54.8%、「非同居」の場合「余裕がある」24.7%、「普通」41.9%、「苦しい」33.3%）。また、全体においても、同様の結果が確認できた（「同居」の場合「余裕がある」8.5%、「普通」36.2%、「苦しい」55.3%、「非同居」の場合「余裕がある」22.9%、「普通」43.8%、「苦しい」33.2%）。

この結果からは、どのようなことが考えられるだろうか。「同居」する家庭の方が、一般に、親世帯から経済的な支援が得易いということも推測される。しかし、逆に考えれば、「苦しい」と答える生活の状況であるから、親世帯の経済的支援を得るために、「同居」をしているという可能性も、考えることができる。

2-2 友人による相談サポート

		将来への展望	自分生活重視	家庭生活重視	福祉社会志向
男性	悩み相談相手有	47.4%(36)	71.4%(55)	63.6%(49)	66.2%(51)
	悩み相談相手無	67.2%(41)	85.5%(53)	62.9%(39)	50.0%(31)
	検定	**	**		*
女性	悩み相談相手有	63.6%(89)	83.6%(117)	80.6%(112)	63.1%(89)
	悩み相談相手無	45.7%(16)	85.7%(30)	60.0%(21)	60.0%(21)
	検定	*		**	
全体	悩み相談相手有	57.9%(125)	79.3%(172)	74.5%(161)	64.2%(140)
	悩み相談相手無	59.4%(57)	85.6%(83)	61.9%(60)	53.6%(52)
	検定			**	*

2-2-1 将来展望

次に、親族以外の支援として、地域における友人関係による相談サポートと、子育て家庭の意識について、分析をした。

まず、親しい友人に「悩みを相談する」相手がいるかどうかと生活意識（将来展望）の関わりについて分析した（表2）。これについては、まず、男性において、有意な違いが確認された。「自分の将来は明るい」との回答は、「相談相手無」男性の方が、「相談相手有」男性よりも高いという結果になった（「相談相手有」47.4%、「相談相手無」67.2%）。これは、一般的な想定（「相談相手がいれば、悩みも解消され、将来展望は明るくなる」とは逆の結果とも考えることができる。女性においては、10%の有意水準での結果だが、この一般的な想定通りの結果が出ている。女性では、「相談相手有」の方が、「相談相手無」よりも、「自分の将来は明るい」と答える割合が高い（「相談相手有」63.6%、「相談相手無」45.7%）。

この男女の差はどのように考えることができるだろうか。この質問文は、「親しい人間関係」について、「どのような関係か」を問い、「悩みを相談する」を選択する形式になっている。男性では、「相談相手がいる」という事が、逆に「悩みがある」ということにつながり、それが、将来への展望につ

ながっているのかもしれない。

2-2-2 自分生活重視志向

「社会や他人のことよりも、自分の生活を重視するか」という意識との関わりでは、男性においてのみ、有意な結果が得られた（表2）。男性では、「相談相手有」男性の方が、「相談相手無」男性よりも、「自分生活重視」志向の割合が低いという結果になっている（「相談相手有」85.5%、「相談相手無」71.4%）。一般に、「悩みを分かち合う友だち」がいることは、自分だけではなく、他人や社会への「思いやり」につながるようにも想定される。2-2-1の結果と併せて考えると、「相談相手有」男性は、様々な生活上の忙しさや辛さの中で、追い込まれてはいるが、その中で、相談相手を見つけることで、「相談相手無」男性よりも、比較的、社会や他人のことにも、視野が及ぶ人もいるという事かもしれない。^{*5}

2-2-3 家庭重視志向

次に、親しい友人に「悩みを相談する」相手がいるかどうかと家庭生活への意識の関わりについて分析した（表2）。女性において、「仕事よりも家庭を重視する」という回答は、「相談相手有」の方が、「相談相手無」よりも、高い傾向が見られることが分かった（「相談相手有」80.6%、「相談相手無」60.0%）。また、男女を合わせた子育て家庭全体の回答でも、同様の結果が得られた（「相談相手有」74.5%、「相談相手無」61.9%）。このことは、逆に考えれば、家庭生活を重視していることがプライベートな時間を大切にしていることにもつながり、結果として、悩みを相談する相手を見つけているということになるかもしれない。

2-2-4 福祉社会志向

「悩みを相談する相手がいるか」という事と「税負担が重くても福祉の充実が良い（福祉社会志向）」という社会意識の関わりを分析した。その結果、10%有意水準だが、差を確認することができた（表2）。まず、男性において、「相談相手有」の方が、「相談相手無」よりも、「福祉社会志向」の割合が高い（「相談相手有」66.2%、「相談相手無」50.0%）。この結果は、男女を合わせた全体でも同様の結果が見られた（「相談相手有」64.2%、「相談相手無」53.6%）。男性については、2-2-2の結果と併せて考えると、「相談相手有」男性は、比較的、「社会や他人のこと」を考える人がいると推測されるので、それが「福祉社会志向」の傾向につながっているとも考えられる。全体の結果についても、やはり、「悩みを相談する相手がいる」ということが、他者への連帯の意識につながり、「福祉社会志向」につながっていると考えられることができる。

2-3 子どもを介した友達関係があるかどうか

		家庭生活重視	定住志向	福祉社会志向
男性	友人関係有	50.0%(3)	83.3%(5)	83.3%(5)
	友人関係無	62.6%(102)	79.3%(130)	57.9%(95)
	検定			
女性	友人関係有	81.4%(70)	73.6%(64)	69.3%(61)
	友人関係無	69.8%(90)	85.4%(111)	51.9%(67)
	検定	*	**	**
全体	友人関係有	79.3%(73)	74.2%(69)	70.2%(66)
	友人関係無	65.8%(192)	82.0%(241)	55.3%(162)
	検定	**		**

2-3-1 家庭重視志向

「子育て家庭内」の差を分析するために、親しい人間関係で、「子どもを介した付き合い」があるかどうか、という変数と生活意識の関わりを分析した。まず、「家庭重視志向」と「子どもを介した付き合いの有無」の関係について、確認した（表3）。女性においては、10%の有意水準だが、「子どもを介した付き合い有」の方が、「子どもを介した付き合い無」よりも、「家庭重視志向」が高いことが分かった（「子どもを介した付き合い有」81.4%、「子どもを介した付き合い無」69.8%）。また、男女を合わせた合計の分析では、検定上より有意な分析結果として、「子どもを介した付き合い有」の方が、「子どもを介した付き合い無」よりも、「家庭重視志向」の割合が高いことが確認できた（「子どもを介した付き合い有」79.3%、「子どもを介した付き合い無」65.8%）。家事・育児と忙しい「子育て家庭」の生活の中で、「子どもを介した付き合い」をしていく中で、「家庭重視志向」が高くなるという事が推測される。

2-3-2 定住志向

次に、「子どもを介した付き合いの有無」と「現在住んでいる地域に住み続けたいかどうか（定住志向）」の関わりを分析した（表3）。この分析では、女性においてのみ有意な差が確認できた。子育て家庭の女性では、「子どもを介した付き合い有」の方が、「定住志向」の割合が、有意に低いという結果が見られた（「子どもを介した付き合い有」73.6%、「子どもを介した付き合い無」85.4%）。この結果は、「子どもを介した付き合いがある」→「地域社会でのつながりが深まる」→「その地域に住み続けたいという思いが強くなる」という一般的な想定とは、逆の結果になっている。ただし、「子どもを介した付き合いの有」と「無」いずれにおいても、「定住志向」は7割以上という結果になっている。

2-3-3 福祉社会志向、

この「子どもを介した付き合いの有無」と「福祉社会志向」という社会意識の関わりを分析した（表3）。ここでは、女性と男女合わせた合計の分析で、有意な結果が得られた。まず、「子どもを介した付き合い有」の女性の方が、「子どもを介した付き合い無」の女性よりも、「福祉社会志向」の割合が高いという結果になった（「子どもを介した付き合い有」69.3%、「子どもを介した付き合い無」51.9%）。男女合わせた合計での結果でも、同様に、「子どもを介した付き合い有」という回答者の方が、「子どもを介した付き合い無」という回答者よりも、「福祉社会志向」の割合が高いという結果になった（「子どもを介した付き合い有」70.2%、「子どもを介した付き合い無」55.3%）。やはり、「子育て」の中で、

他の家庭の状況なども知ることが、特に子どもにおける「福祉」施策に対する関心を高めているという事が推測される。

2-4 友人関係の広がりの違い

表4 友人関係の広がり和生活意識の関わり

		生活満足
男性	友人数多数	77.5%(55)
	友人数少数	65.1%(56)
	検定	*
女性	友人数多数	69.6%(48)
	友人数少数	75.4%(101)
	検定	
全体	友人数多数	73.6%(103)
	友人数少数	71.4%(157)
	検定	

2-4-1 生活満足

ここまでの2項では、いわば、子育て家庭の人間関係の中でも、その「質」に注目して、分析を進めてきたが、この項では、いわば、人間関係の「量」に注目して、分析を進めたい。まず、友人関係についての質問の中で、「親友」「仲の良い友人」の人数を聞く質問があり、その平均が、それぞれ、「親友」は3.09人、「仲の良い友人」は10.82人となっている。ここでは、この「親友」「仲の良い友人」を合計し、「13人以上」のグループ（「友人数多数」と「13人未満」のグループ（「友人数少数」）で、子育て家庭の中で、生活意識がどのように違うのか、分析を行った。

この「友人関係の量」と「生活意識」の関わり分析では、「生活満足」について、男性において、10%水準だが、違いが確認された（表4）。「友人数多数」の男性の方が、「友人数少数」の男性よりも、生活について「満足」と答える割合が高いことが分かった（「友人数多数」77.5%、「友人数少数」65.1%）。なお、女性においては、有意な差は確認できないものの「友人数少数」の方が、「友人数多数」よりも、生活について、「満足」と答える割合が高いという逆の結果になっている。

この「友人関係の量」と「生活意識」の関わり分析では、「生活満足」について、男性において、10%水準だが、違いが確認された（表4）。「友人数多数」の男性の方が、「友人数少数」の男性よりも、生活について「満足」と答える割合が高いことが分かった（「友人数多数」77.5%、「友人数少数」65.1%）。なお、女性においては、有意な差は確認できないものの「友人数少数」の方が、「友人数多数」よりも、生活について、「満足」と答える割合が高いという逆の結果になっている。

表5 結婚・子育てと友人関係の関わり

		お金や物の貸し借り有	
男性	既婚	13.2%(24)	
	未婚	22.1%(17)	
	検定	*	
女性	既婚	18.8%(43)	
	未婚	32.3%(21)	
	検定	**	
全体	既婚	16.3%(67)	
	未婚	26.8%(38)	
	検定	***	
		お金や物の貸し借り有	友人数多数
男性	子ども有	13.3%(20)	45.6%(78)
	子ども無	19.6%(21)	35.0%(42)
	検定		*
女性	子ども有	18.5%(36)	33.3%(75)
	子ども無	27.6%(32)	42.2%(57)
	検定	*	*
全体	子ども有	16.2%(56)	38.6%(153)
	子ども無	23.8%(53)	38.8%(99)
	検定	**	

3. 結婚・子育てと友人関係のかかわり

3-1 既婚/未婚

3-1-1 お金や物の貸し借りをする友人の有無

2節では、「子育て家庭」における生活や社会に対する「意識」に焦点を当て、分析をしてきたが、結婚・子育てに関わる「行動」と友人関係の関わりを分析したい。

まず、「結婚」に関しては、既婚者の方が、未婚者よりも、「お金や物の貸し借りをする友人がいる」割合が少ないことが分かった（表5）。これは、「男性」、「女性」、「男性女性を合わせた合計」の3つの集計の全てで、

有意な差が確認できた（男性「既婚者」13.2%/「未婚者」22.1%、女性「既婚者」18.8%/「未婚者」32.3%、全体「既婚者」16.3%/「未婚者」26.8%）。既婚者においては、友人に、「お金」や「物」の貸し借りを求めることが、難しい状況があるのではないかと推測される。

3-2 子どもの有無

3-2-1 お金や物の貸し借りをする友人の有無

それでは、「子どもの有無」と、この「お金や物の貸し借りをする友人がいるか」という変数の関係はどうだろうか。ここでは、「男性女性合わせた合計」において、5%の有意水準の有意な結果が確認された（表5）。「子どもがいない」回答者の方が、「子どもがいる」回答者よりも、「お金や物の貸し借りをする友人」がいる割合が高いという結果になった（「子どもがいる」16.2%、「子どもがいない」23.8%）。（女性においては、10%の有意水準だが、同様な結果が得られた。「子どもがいる」18.5%、「子どもがいない」27.6%）。このように考えると、「子育て家庭」では、友人に、「お金」や「物」の貸し借りを求めることが、難しい状況があるという事が推測される。

3-2-2 友人関係の広がりとの関連

3-1-1と3-2-1では、友人関係の内容（質）との関わりだったが、それでは、友人関係の広がり（量）との関わりはどうだろうか。「友人数多数（13人以上）」と「友人数少数（13人未満）」のグループで比較をしたところ、10%の有意水準だが、男女で逆の結果が確認できた（表5）。「男性」においては、「子どもがいる」男性の方が、「子どもがいない」男性よりも、「友人数多数」の割合が高いという結果になった（「子どもがいる」45.6%、「子どもがいない」35.0%）。一方、女性においては、逆で、「子どもがいない」女性の方が、「子どもがいる」女性よりも、「友人数多数」の割合が高いという結果になった（「子どもがいる」33.3%、「子どもがいない」42.2%）。女性においては、「家事・育児」などの負担がより大きく、友人と過ごす時間が少なくなることが推測され、それによって、友人数が少なくなっている傾向が見られるという事だろうか。

3-3 子育て家庭内の子どもの数の差異

3-3-1 子どもを介した友人がいるかどうか

	子どもの平均人数	検定
子どもを介した友人有	2.02人(105)	**
子どもを介した友人無	1.80人(323)	

最後に、「子どもを介した友人の有無」と「子どもの人数」の関連を分析した。当然、子どもの人数が多い方が、知り合うきっかけも多くなると推測される

ことから、「子どもを介した友人がいる」という回答も多くなると考えられるが、その違いは、確認できるか、「平均の子どもの人数」を集計し、分析したところ、有意な結果が得られた（表6）。「子どもを介した友人がいる」回答者の方が、「子どもを介した友人がいない」回答者よりも、実際に、「子どもの人数」が多いことが確認できた（「子どもを介した友人有」2.02人、「子どもを介した友人無」1.80人）。2-3で見たように、この「子どもを介した友人がいる」回答者は、家庭重視志向が強かったり、また、福祉社会志向が見られる回答者であることが分かっている。こうした子どもを介したネットワークを持った子育て家庭が、子育てを中心とした新たな家族のライフスタイルを志向しているとも考えられる。

4. 問題の整理

ここまで、「子育て家庭」に対して、家族や地域社会での人間関係の様相が、生活意識・社会意識・生活態度・行動とどう関係しているのかを分析してきた。分析の結果を5つのポイントにまとめる。

*6

（1）親同居と生活意識

- ・親と同居をしていない回答者の方が同居している回答者よりも生活に満足している割合が高い。
- ・「暮らし向き」について、同居していない回答者の方が、同居している回答者よりも、「余裕がある」割合が高い。

（2）友人による相談サポートと生活意識・社会意識

- ・「将来は明るい」と「友人による相談サポートの有無」の関わりについては、男女で、逆の結果。（男性は、「相談相手有」の方が、「将来は明るい」とする割合が低く、女性では、「相談相手有」の方が、「将来は明るい」とする割合が高い）
- ・男性では、「相談相手有」とする回答者の方が、「自分の生活重視志向」が低い。
- ・「相談相手有」とする回答者の方が、「家庭生活を重視する」という割合が高い。
- ・「相談相手有」とする回答者の方が、「福祉社会志向」の割合が高い。

（3）子どもを介した人間関係と生活意識・社会意識

- ・「子どもを介した付き合い有」の方が、「家庭生活重視志向」の割合が高い。
- ・「子どもを介した付き合い有」とする回答者の方が、「福祉社会志向」の割合が高い。

（4）友人関係の広がり和生活意識

- ・「友人数多数」の男性の方が、生活について、「満足」と答える割合が高い。

（5）友人関係と結婚・子育て

- ・既婚者の方が、未婚者よりも、「お金や物の貸し借りをする友人がいる」割合が少ない。
- ・「子どもがいない」回答者の方が、「子どもがいる」回答者よりも、「お金や物の貸し借りをする友人がいる」という割合が高い。
- ・「子どもの有無」と「友人関係の広がり」については、男女で逆の結果（男性では、「子ども有」の方が、「友人数多数」の割合が高く、「女性」では、「子ども無」の方が、「友人数多数」の割合が高い）
- ・「子どもを介した友人がいる」回答者の方が、「子どもを介した友人がいない」回答者よりも、子どもの人数が多い。

以上の5点で確認した「子育て家庭」の「生活意識」「社会意識」そして「行動」の分析からは、家族との関係や友人との関わりの中で紡がれるライフスタイルや、また、その置かれた「社会状況」も見え隠れする。その状況を5節で考察し、まとめたい。

5. まとめと課題

本稿の分析から見てきた「子育て家庭」と「身近な人間関係」の関わりを3つのキーワードから整理したい。

1つ目は、「子育て家庭」の「親同居」の難しさである。同居による、様々なメリットがあると推測されるにもかかわらず、「生活満足」も比較的 low、また、「暮らし向き」についても、「苦しい」とする割合が、高くなる。注4で見たような、「親世代」と協力しての「子育て」では、やはり、ライフスタイルや価値観の違いが、ハードルとなると推測される。

2つ目は、「子育てを中心としたコミュニティでのライフスタイル志向」である。これは、主に、2-2、2-3、2-4の「意識」の分析から言えることだが、「子育て家庭」では、地域社会において、友人関係による相談サポートや子どもを介した人間関係を背景に、「仕事よりも家庭生活」を重視し、また、社会意識としては、「福祉社会」を志向する回答者が見られた。これは、やはり、現代の「子育て」という、一つの家族の中だけでは完結しない営みの中で、地域や社会とのつながりを再確認し、(いわゆる「労働」中心の生活にとどまらない)「家庭生活」の価値が再考されている、と考えることもできるだろう。

3つ目は、2つ目と相反するようだが、「子育て家庭の孤立」という問題である。これは、主に、3節の「行動」の分析から言えることだが、「子どもがいる家庭」の方が、様々な面で、物質的な支援も必要とする場面もあると推測されるが、それ以外の家庭よりも、「お金や物の貸し借りをする」友人がいる割合が低くなる傾向が見られ、また、子どもがいる女性は、それ以外よりも、友人が少ない傾向が見られる。「お金や物の貸し借り」ができるかどうかは、人間関係上の距離感とも関わると考えられ、「子育て家庭」の難しい立場を示している。少なからず、「暮らし向きが苦しい」と答える家庭もいる。「子育て家庭」に対して、「友人」による経済面でのインフォーマルな支援が難しいとすれば、やはり、公的なサポートが必要とされていることになるだろう。また、女性が、子育てをしていく中で、友人数が、子どもがいない時よりも少なくなるという傾向は、やはり、仕事・家事・育児という負担の中で、友人関係に、「時間資源」を割くことが難しくなる状況と関わっているのではないかと(一方、男性では、「子ども有」の方が、「友人数多数」の割合が高くなり、また、「子育て家庭」においては、「友人数多数」の男性の方が、「生活満足」と答える割合も高いことが確認されている)。

「子育て家庭」の世帯収入や末子年齢別の分析において、「生活資源(経済資源・時間資源)」の分かち合いを、どのように地域社会で進めていくのか、ということが焦点となるということを描いた(二方2017:57)。今回、分析した身近な人間関係は、この「分かち合い」においても、重要な役割を果たすと考えられる。

価値観やライフスタイルの相違で、異世代との「同居」による「子育て」の難しさがあるとすれば、「同世代」との(相談サポートのような)インフォーマルな「社会的連帯」を背景として、協業としての「子育て」を志向するということになるだろう。しかし、一方で、互いの家庭の経済的な困難があるからか、いわば、「経済的なインフォーマルな連帯」は、なかなか、進んでいない。この「経済資源」の分野に関しては、やはり、公的なサポートが重要となっていると言えよう。このように、今回の分析を通し、「生活資源の分かち合い」の方向性の一端を確認することができた。

本稿の分析は、試行的なものであり、課題も多い。例えば、家族関係については、「親同居」の分析を今回は行ったが、「同居」ではなく、近隣に、「親世帯」が住むこと(「近居」)により、「物心両面」での支援がどのように可能なのかなども分析する必要があるだろう。また、「子育て家庭」に対する相

談サポートとしては、今回は、地域の友人関係によるインフォーマルなサポートを取り上げたが、幼稚園・保育園・学校などの「社会機関」による相談サポートの普及による生活意識の変化の分析なども課題だろう。

「子育て家庭」に対する支援においては、公的なセクターの役割は、もちろん大きいですが、今回分析したような身近な人間関係によるインフォーマルな「連帯」も重要な役割を果たしている。「時間資源」や「経済資源」といった「誰にとっても重要な生活資源」の「分かち合い」は、その重要性故に、なかなか、簡単には進まない。しかし、「子育て家庭」の負担が、その両面で大きくなり、それが「少子化」などとして、社会全体へ影響を与えていることは、明らかである。「公的なセクター」への支援を求めることはもちろん、家族関係や地域社会の人間関係など多様な担い手が「子育て」に参画し、連帯を進めていくことが重要であると言えよう。

注

1) 生活時間の分析からは、子育て家庭の男性の長時間労働の実態や、女性が「仕事・家事・育児」の全ての負担の中で苦しんでいる実態が、明らかになった。こうした、若い世代の「忙しさ」の問題は、「ブラック企業」での「過労死」などが大きく報道されることにより、近年、改めて社会問題化している。

2) 本稿では、青少年研究会が、2012年11月・12月に、全国の30歳から49歳の男女719名を対象に訪問留め置き回収法と郵送回収法で行った調査(「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」)のデータを使用する。調査地は、東京都杉並区・神戸市灘区・東灘区である。有効回収率は、39.9%だった。(なお、この調査では、16~29歳対象の調査と30~49歳対象の調査の2つが並行して実施されたが、本稿の分析は、後者の調査によるものである)

この調査は、以下の研究プロジェクトで実施されたものであり、青少年研究会2015にまとめられている。

平成23年度～平成25年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究—世代間/世代内比較分析を通じて—」(研究代表者 藤村正之)

3) 本稿で使われている各変数は、次の通りである(それぞれの変数は、分析に合わせて、適宜、選択肢を足し合わせるなどの整理をしている)。表中の()内は度数である。なお、検定は、表6は、一元配置分散分析、表6以外は、カイ二乗検定である。*は10%、**は5%、***は1%の有意水準であることを示す。

「世帯種別」…F2「現在、結婚していますか」とF4「あなたにお子様はいらっしゃいますか。いる場合は人数と一番下のお子さんの年齢をご記入ください」を使い、「結婚していて、子どもが0~18歳」(374人)あるいは「離婚していて、子どもが0~18歳」(16人)という回答者を「子育て家庭」(390人)とし、「結婚しているが、子どもが19歳以上」(16人)あるいは「結婚しているが、子どもがない」(107人)という回答者を「非子育て家庭」(123人)としている。「未婚」(172人)は「結婚したことはない」という回答者である。

(なお、これ以外の選択肢については分析から外した)

2・3節で扱った以下の意識に関する質問については、選択肢が4択(「1.そうだ」「2.どちらかといえばそうだ」「3.どちらかといえばそうではない」「4.そうではない」あるいは「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」となっていたため、肯定/否定の2択に再分類して分析を進めた。

「生活満足」…Q41a「現在の生活に満足している」

「将来は明るい」…Q41j「自らの将来は明ると思う」

「自分の生活重視志向」…Q41d「社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」

「家庭重視志向」…Q41e「仕事よりも趣味や家庭を大事にしたい」

「福祉社会志向」…Q46h「税負担が大きくても、福祉などの行政サービスが充実した社会がよい」

「定住志向」…Q41h「現在住んでいる地域に今後も住み続けたい」

2節で扱った「親と同居しているか」の質問は、「F5 現在、親と同居していますか」という質問での「同居している」「同居していない」という回答を集計した。

2・3節で扱った「子どもを介した付き合いがあるか」は、「Q30 同居しているご家族以外で、あなたにとって親しい人を、あなたにとって親しい順に最大3人まで思い浮かべてください」という質問の中で、「d）その人と知り合ったのはどこですか」の「6. 子どもを介したつきあいで」に○としている回答である。同様に、「お金や物の貸し借りをするか」「友人による相談サポート」は、「Q30 同居しているご家族以外で、あなたにとって親しい人を、あなたにとって親しい順に最大3人まで思い浮かべてください」という質問の中で、「g）その人とは、どのような関係ですか」で「3. お金や物の貸し借りをする」「4. 悩みを相談する」に○としている回答である。

2・3節の「友人関係の広がり」は、「Q31 あなたとつきあいのある友人を、親しさの度合いによって「親友」「仲のよい友人」「知り合い程度の友人」に分けるとすると、それらはそれぞれ何人いますか」という質問において、「a）親友（恋人は除く）」（平均 3.09 人）と「b）仲のよい友人（親友を除く）」（平均 10.82 人）の回答を合計し、「13人以上」のグループを「友人数多数」、「13人未満」のグループを「友人数少数」として、集計した。

2節の「暮らし向き（経済的状況）」は、「F10 現在、あなたの家の暮らし向きは、いかがですか。あてはまるもの1つに○をしてください」という質問で、「1. 余裕がある」と「2. やや余裕がある」を合計し「余裕がある」、「3. ふつう」はそのまま「ふつう」、「4. やや苦しい」と「5. 苦しい」を合計し「苦しい」として集計した。

3節の「未婚/既婚」は、「F2 現在、結婚していますか」という質問で、「1. 結婚したことはない」という回答を「未婚」、「2. 結婚している」という回答を「既婚」として集計した。

4) 子育てにおける親世代と祖父母世代の価値観の違いへの対応については、例えば、さいたま市の発行する「祖父母手帳」などに見られる（さいたま市子ども未来局 2015）。さいたま市では、この手帳について、「本冊子は、祖父母世代に対しては「今の子育て」の常識を、親世代に対しては「昔の子育て」の常識を理解してもらい、世代間ギャップを埋め、相互のコミュニケーションがより円滑になるようお願い、作成した」としている（さいたま市ウェブサイト <http://www.city.saitama.jp/007/002/012/p044368.html> より）。「孫育て」という言葉で、子育てへの祖父母の参加が望まれる一方、「祖父母世帯」と「親世帯」の子育てに関するコミュニケーションを円滑に進めることの難しさが表れているのではないかと。

5) ただし、検定上有意な結果ではないが、この「相談相手有」男性については、「相談相手無」男性よりも、生活に満足している回答の割合が低いという結果になっている（「相談相手有」67.5%、「相談相手無」77.4%）。女性においては、「相談相手有」の方が高いという逆の結果になっている（「相談相手有」77.9%、「相談相手無」68.6%）。

また、これも検定上有意な結果ではないが、女性においては、「相談相手有」の方が、「この地域に住み続けたい（定住志向）」という割合が高く、「生活満足」や「将来展望」の結果と併せて、相談相手がいることと生活の安定がつながっていることが推測される。（「子育て家庭」の女性における「定住志向」の割合「相談相手有」83.6%、「相談相手無」71.4%）

6) (1)～(4)の「意識」の分析は、「子育て家庭」内での分析であるが、(5)は、「子育て家庭」に至る「行動」等との関わりの分析であることから、「子育て家庭」以外の回答者も含んだ集計となっている。

文献

- 二方龍紀,2014,「子育て家庭の生活と支援—生活時間調査からの考察—」『清泉女学院短期大学研究紀要』32:11-21.
- 二方龍紀,2015,「子育て家庭の生活時間—平日と休日の比較を通して—」『清泉女学院短期大学研究紀要』33:19-31.
- 二方龍紀,2016,「子育て家庭の意識と行動—中年調査からの考察—」『清泉女学院短期大学研究紀要』34:43-52.

二方龍紀,2017,「子育て家庭における生活意識・行動の差異—世帯収入・末子年齢別による分析—」
『清泉女学院短期大学研究紀要』35:50-59.

さいたま市子ども未来局,2015,「さいたま市祖父母手帳」.

(http://www.city.saitama.jp/007/002/012/p044368_d/fil/sofubotechou.pdf)

青少年研究会,2015,『平成23年度～平成25年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果
報告書「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究—世代間/世代内比較分析を通じて—」』上智大学総合人間科学部社会学科.

SUMMARY

This paper aims to analyze how the opinions and behaviors of child-rearing families are related to their relationships with family and friends. A higher proportion of respondents who did not live with their parents than those who did (i.e., three-generation households), were satisfied with their lives and described their “life (financial) situation” as “comfortable.” Furthermore, a higher proportion of respondents who have a friend they can go to when they need advice put emphasis on home life and were more “welfare society-oriented” than were respondents who did not have such a friend.